

話題提供3 『リベラル・ラーニング』と教養形成

松 浦 良 充 (慶應義塾大学文学部・教授)

(松浦) これからお話しすることは、本当は学問的、理論的にはかなり詰めてお話ししなければならない内容でもあるのですが、話題提供という位置づけを頂いておりますので、それに甘えてかなり大ざっぱな話をさせていただきたいと思います。基本的にはパワーポイントは発表論文集の内容をアウトライン化したものですので、配付資料としてお配りしておりません。少し発表論文集の内容を補足するスライドもありますが、基本的には論文集に沿った形でお話をしていきたいと思います。

私の立場をご説明いたします(スライド2)。専攻は教育学でございます。先ほど大塚先生からもご紹介いただきましたが、アメリカをフィールドとして日本およびアメリカの大学、高等教育の問題を対象に、教育学をディシプリンとして考えています。ただし、思想史や歴史の観点を大切に考えていこうとしています。本日の会場の中では、恐らく教育学の研究者はマイノリティではないかと思いますが、教育学にとって大学研究は、後発分野であり関心が持たれてこなかったところ。最近では教育学の中でも高等教育研究が関心を集めるようになりましたが、社会的な研究が非常にメジャーであります。私は先ほどもお話ししましたように思想史として大学史、リベラル・アーツの歴史などを研究しています。

ここで強調しておきたいのは、大学教育なのですから、教育学が大学の問題を考えるのはある意味当然です。しかし一方で、教育学が大学を考えるときに、あるいは大学教育問題を考えるときに、見えないものも出てきてしまいます。そのことで私は思想史という立場をかなり大切に大学研究をやっています。というのは、教育学にとっては当然のことながら、初めに教育ありきというところから発想をします。ですから、教育というものがある意味ブラック・ボックスになってしまって、教育と教育でないもの、あるいは人間の大きな知的営みの中で、教育が持っている限界のようなものが見過ごされる傾向があります。教育が自明視されてしまう、セルフ・エビデントなものになってしまうということです。考えてみれば教育という概念や考え方、あるいは行動様式は、最近よく指摘されてポピュラーなものになっているかと思いますが、近代社会の中で生まれてきた概念であります。ところが、大学史もリベラル・アーツも、そういう近代的な「教育」概念の誕生以前からずっと脈々と続いているものであって、大学史やリベラル・アーツの歴史にとっては、初めに「教育」ありきではないのです。教育史が大学史を見ることには、おのずと限界もあるのだということを考えなければならないのではないかと考えています。そういうことで最近私は、日本やアメリカの大学において「教育」という観点がいつから生まれてきたのかに関心を持って、比較教育学の立場から調べています。そうしたことは結局何につながっていくか、やはり私たちの大学像をもう一度改めて議論して構築していかなければならないのではないかとこの観点からの研究であります。

こうやって思想史や比較と申しますと、こちらには恐らく実践的な関心の強い方がほとんどを占めておられると思いますので、何か遠い話を偉そうにするのではないかとされるかもしれません。しかし、私も前の勤務先の私立大学で10年ほど、やはり一般教育の組織や運営方式、カリキュラム改革に学長室長、教務部長という立場で携わっていました。そのとき、結局実務に追われながら、やはり究極的には大学とは何なのかという問いがないまま話が進んでいかなるをえなかったことに、思想史の研究者として痛恨の思いがあり、それがある種のトラウマになっています。いまは勤務先も変え、きちんと勉強したいとの思いがあります。そういう背景があるということで、今日の話をお願いしたいと思います。

まえおきとして、もう一つ、大学像を議論するときに、今の時点の高等教育研究や大学研究で考えなければならないのは、大学を語る言葉や概念の貧困という問題がある、ということを描きおきたい、と思います。あるいは混乱と言っていいかもしれません。本日も午前中や今までの議論で、教養、リベラル・アーツという言葉が何度も出てきたと思います。しかし、それらの意味内容は、お使いになっている先生がたで差異があります。大学改革の議論の

ときにもそうですが、みんなリベラル・アーツは大切だと言います。そこでいったん合意をします。しかし、それをカリキュラムに落としたり、運営組織に落とすときに、全く違った理解をしていたということがあります。リベラル・アーツにしても、あるいは大学という言葉にしても、歴史の中に生まれてきた概念ですから、そういう歴史性を捨て去ったところで議論をしてはいけません。やはり思想史によって、大学を語る言葉を、きちんと裏づけのあるものとして作っていかないと、幾ら実践を積み重ねても、幾ら改革を積み重ねても、大学教育の理論は、いつまでたっても成立しないのではないか、という思いがあります。

そういう中で、私が今回特に考えてみなければいけないのではないかと思います。教育の構築というのも確かに大切ですが、もっと根本にある大学における学習概念をやはり再構成していく必要があるのではないのかということです(スライド3)。論文集にも書きましたが、さまざまなニーズが大学教育に押し寄せてきて、先ほどご紹介もあったようなさまざまな学部ができてきていることもあります。伝統的な大学像も崩壊していますし、あるいは大学とは何なのかと今更問うことすらも許されない。結局、来年のカリキュラムをどうするかという話になっていくのです。何か大学は有機的な統合体のようなつもりでいたのですが、気がついたらいまは機能の複合のような形になっています。しかし、大学が知的専門職の集団であるとき、自己像が分からない大学というのは、これ以上の皮肉は存在しないのではないかと思います。

大学教育や大学像が多様化していく中で、しかし一方で、では大学で学生に何を学ばせようとしているか、あるいはいかに学ばせようとしているかという学習観というもの、実は驚くほど一元化してしまっているのではないのかと思います。これには教育学の責任もあります。教育学は、ティーチングとラーニングの相関性が高いほどティーチングが成功したという考え方で進んできています。要するに学習が、教育によって生み出される制御可能性の高い、測定可能な知的営為に限定されているのです。これは昨今の大学教育改革の中でのさまざまな試みにも顕著です。シラバスにしても、GPAにしても、厳格な成績評価にしても、もちろん今までの日本の大学に足りなかった非常に重要な観点ではあります。しかし、そうしたものを貫いている大学の学習観が非常に一元的なものになってしまっているのではないのかということです。これを私は、論文集のなかで教育学的学習概念と呼びました。

ところで教育学では、学習という概念について、ここ10年ほど20世紀の行動主義心理学の影響を受けて、ティーチングとラーニングの相関性を高めるような教育観、学習観への内部からの批判が出てきました(スライド4)。一方で構成主義、認知科学の発展に影響を受けて、能動的な学び論というものをつくっていきこうという動きが出てきています。もちろん学習論から学び論への転換、あるいは教育、教えることから学ぶことへのシフトは、これは最近の大学教育の世界でもよく議論されてきていることだと思っています。ただ、こうした学習論の展開の中でやはり気になるのは、最も素晴らしい学びがどこかにあって、すなわち真の学びというものがある、それが、教えられることによって学ぶ学習ではなくて、自らが能動的に学ぶのがベスト・ラーニングなのだという考え方に、どうしても教育学は流れていってしまうということです。

それはそれでいいのですが、そうした影響が大学教育の世界にもどんどん押し寄せてくる一方で、すでにインターンシップ、ものづくりという構成主義的な学びの大学教育実践もまたさかんに始まってきています。しかし結局そうした学び論が展開しただけであって、依然として根底ではただ一つの真の学びというのがどこかにあって、それを追求していくのだ、という議論があります。今までの流れを見ていくと、大学教育の世界にも今後そうした議論が出てくるのではないかと思います。

もちろんそういう展開があってもかまわないと思いますが、やはりいま一度大学における知的営為がどうあったらいいのか、単に唯一の知的営為ではなくて、どのような学び、学習の可能性を大学できりひらいてゆくのか。もちろん教育学的な学習の概念もなくなりたくないと思います。資格付与との関係があれば、その国家試験なり、検定試験に向けた教育が行われていかなければなりません。しかし、学習という教育学の用語には、先ほど来申し上げているようなティーチングーラーニングの相関性に基づく、ある意味受動的な学習という側面があります。しかし、このラーニングという英語には、私たちに大学人にとっては、学問、学識という意味もあります。最近では身体化された知ということも言われたりして、ある意味大学教育というのは、従来はコンテキストから切り離れた知識を学ぶ場と

いう位置づけもあったわけですが、最近では実習、臨床への関心も出てきます。実は大学における学習観が非常に多様になっている中で、今までの初等中等教育において、教育学が展開してきたような学習論や学習理論、あるいは学習論を超えていくような大学における知的営為としてのラーニング、概念をつくっていくことができるし、つくっていくことが必要なのではないかと考えています。

そこから少し話を発展させて、大学における教養形成について考えてみたいと思います (スライド5)。私もそのパートについてお話をするようにということで、ここに呼んでいただいたのだと思います。結論から言いますと、これにはいろいろな賛否両論があり、私が研究のフィールドとしているアメリカの中でもいろいろな議論があります。アメリカの中のアンダーグラデュエイト・カレッジにおけるリベラル・エデュケーションは、ある意味かなり歴史的に見ても成功しているし、完成型に近づいているのではないかと思います。しかし、往々にしてリベラル・エデュケーションは誤解をされています。これを教養教育と言ってしまい、その教養教育を日本的な文脈の中で、一般教育とほぼ互換的な言葉として使ってしまうところに大きな問題があると思います。

アメリカにももちろんいろいろ議論がありますが、私の知る限りリベラル・エデュケーションというのは、アンダーグラデュエイトの4年間で三つの要素から構成されます。ゼネラル・エデュケーションとスペシャライズド・エデュケーション、そして、エレクトィブス (選択科目) です。要するに広さと深さと多様性を組み合わせて、理念的にもカリキュラム的にも組み合わせた中で教養人の養成をします。だから、寺崎先生のおっしゃっているような専門人としての内容も含み込んだ概念であるのが、リベラル・エデュケーションです。

ところが、日本では往々にしてこのゼネラル・エデュケーションとリベラル・エデュケーションの区別が意識されずにいます。アメリカで4年間リベラル・エデュケーションをやっていますと言ったときに、4年間、人文・社会・自然の3均等履修をしているという誤解がなされたりすることがあると思います。しかし、リベラル・エデュケーションというのは、広さ・深さ・多様性という専門性も含んだ概念として成立していることに留意していかなければいけません。

ただし、学習と教育の関係からすると、アメリカのリベラル・エデュケーションにも問題があります。操作性の強い教育、学習を操作しようとする教育にもすごく特化しているということです。これには歴史的背景がありますし、ある意味歴史的なアイロニーを見いだせるのですが、ここで詳しくお話する余裕がありません。たとえば、リベラルにはいろいろな意味がありますが、一つの意味として、もともとレジャー・クラスの教育だったわけです。レジャーというのはフリータイムであって暇なわけです。しかし、アメリカのリベラル・エデュケーションのコースワークというのは、先生がたはご承知のようにミッドタームがあり、クイズがあり、テストがあり、ファイナルがあって、もう忙しくて忙しくてしょうがないのです。皮肉なものです。別にフリーやレジャーという意味だけを重視する必要はないわけですが、恐らく日本人の考える教養という意味からすると、ドイツ語のビルディングの影響を非常に強く受けていて、自己形成の意味が強いものですから、コースワークにあくせくして教養を身につける、というのには実は違和感があるはずですが、教養教育という言葉自体も、教育によって教養が形成されることが前提になっていますので、おかしい言葉だと私はずっと主張しています。日本的な自己形成の要素を強く含む教養と、アメリカ的なリベラル・エデュケーション、非常に学習の操作性の強い、他律的な学習を強いられるリベラル・エデュケーションとのギャップというものが、日本のリベラル・エデュケーション、リベラル・アーツに関する議論の中で、混乱を招くことになっているのではないかと思います。

そうしたときに先ほどお話ししたようなラーニングという言葉の広がりを使っていて、リベラル・ラーニングという言葉で、学士課程の4年間の教育理念を構築していく必要があるのではないのか、教育によらないラーニングも重視していく必要が、これからの大学教育にあるのではないのかと思います。

もう一度、実はリベラル・ラーニングという概念で考えたときに、本日のシンポジウムの課題になっている専門職教育との関係も、ある意味統合的に把握していくことができるのではないかと思います。この辺の概念史の詳しい議論をする時間がほとんどございません。もともとというか、歴史的に見れば18~20世紀に入る直前までで、いわゆる伝統的なプロフェッションというのは、ラウンド・プロフェッション、リベラル・プロフェッションと少なくともアメリカでは呼ばれていました。ラウンド・プロフェッションとリベラル・プロフェッションはほぼ互換的に使われて

いるというのが歴史的な実態だと思います。プロフェッションがラードであるということは、学識あるプロフェッション、すなわちリベラル・エデュケーションを受けなければ就けないような職業であったから、プロフェッションだと呼ばれていたということがあります。

そうしたことも考えていくと、これからの日本の学士課程もあまり教養教育という言葉にこだわらない形で、リベラル・ラーニングという概念を軸に、4年間の学士課程の思想を練り上げていく必要があるのではないのかと思って、何か先生がたのお考えの材料になればということでお話しさせていただきました。ありがとうございました（拍手）。

（大塚） やはり語源にさかのぼってちゃんと理解しておくことは非常に重要だということを、また改めて再認識させていただきました。

それでは最後になりますが、京都大学の大山先生から話題提供をよろしくお願いいたします。

第13回大学教育研究フォーラム
 @京都大学高等教育研究開発推進センター
 3/27/2007

シンポジウム:
 「大学教育の再構築—専門職化と教養教育再編の狭間で—」

「リベラル・ラーニング」と教養形成

松浦良充(慶應義塾大学・文学部)

ymatsuur@flet.keio.ac.jp

はじめに

- 提案者の立場
 - 教育学による大学(教育)研究—その可能性と限界
 - Intellectual Historyとしての大学史・Liberal arts史
 - 日米の大学・高等「教育」の誕生と展開
 - 大学像の検証と構築
- 提案の骨子
 - 大学における「学習」概念の再考
 - 「学習」から「ラーニング」という捉え方へ
 - 専門職化と教養教育再編のなかでの大学の統合理念としての「リベラル・ラーニング」の提唱

「リベラル・ラーニング」と教養形成(松浦良充)

2

1. 大学教育の再構築と「学習」概念

- 大学教育の再構築に不可欠なのは、大学における「学習」概念の再構成。
- 伝統的大学像の崩壊
 - 大学(教育)へのニーズの多様化
- 機能の複合体としての大学
 - 自己像を結べない大学
- 大学における「学習」観の一元化
 - 教育(Teaching)と学習(Learning)の相関性
 - 教育によってうみだされる制御可能性の高い、測定が容易な知的営為としての学習

「リベラル・ラーニング」と教養形成(松浦良充)

3

2. 「学習」から「ラーニング」へ

- 教育学的学習概念
 - Teaching-Learningの概念的・機能的分化と相関化
- 日米の大学における「教育」化
- 「学習」論から「学び」論への転換
 - 受動的な学習から能動的な学びへ
- The One Best Learningの追求
- 大学における多様な知的営為としてのラーニング
 - 学習
 - 学識
 - 身体化された知

「リベラル・ラーニング」と教養形成(松浦良充)

4

3. 大学教育の統合的理念としての「リベラル・ラーニング」

- 教育(システム・機能)によるラーニングの分断
- 統合理念としてのLiberal Educationの構造
 - General/Specialized/Elective
- Liberal arts はどのように学ばれてきたのか
- 教養形成としてのLiberal Learning
- Liberalの思想的意味
- Liberalは、Professionalと対立するのか
 - profession(al)の概念史
 - learned profession, liberal profession

「リベラル・ラーニング」と教養形成(松浦良充)

5

むすび

- 大学教育の再構築には、多様な学習・学びの形態を包含するような、大学におけるラーニングの再構成が不可欠である。
- 大学における知的営為を「リベラル・ラーニング」という概念で練り直す。この概念のもとに、教養形成(いわゆる専門化教育を含む)と専門職養成のシステムを統合的に設計することが、初等・中等教育、あるいは他の中等後教育における学習との差異をうみだすことになる。
- そのラーニングの再構成はもはや個々の大学や部局の努力のみによって達成されるものではなく、日本の大学システム全体の再構築へと拡張される必要がある。

「リベラル・ラーニング」と教養形成(松浦良充)

6

文献 ①

- Hager, Paul. 2005. "Philosophical Accounts of Learning." *Educational Philosophy and Theory*, 37-5.
- Kimball, Bruce A. 1995(1992). *The "True Professional Idea" in America*. Lanham, Maryland: Rowman & Littlefield Publishers, Inc.
- Levine, Donald N. 2006. *Powers of the Mind: The Reinvention of Liberal Learning in America*. Chicago: The University of Chicago Press.

「リベラル・ラーニング」と教養形成(松浦良充)

7

文献 ②

- Oakeshott, Michael. 2001(1989). *The Voice of Liberal Learning*. Indianapolis: Liberty Fund, Inc.
- 松浦良充. 2006. 「アメリカ高等『教育』の誕生—リベラル・アーツとその『教育』—」〔田中克佳編『「教育」を問う教育学—教育への視点とアプローチ—』慶應義塾大学出版会〕.
- 松浦良充. 2004a. 「Learningの思想史・序説—Liberal Artsはどのように学ばれたのか—」『近代教育フォーラム』第13号、教育思想史学会.
- 松浦良充. 2004b. 「『リベラル・アーツ』をめぐる理解と誤解—比較大学・高等教育史の視点から—」『教育文化』第13号、同志社大学文学部教育学研究室.

「リベラル・ラーニング」と教養形成(松浦良充)

8